

「茶旅」  
”こぼればなし”

(39)  
沖繩のお茶  
さんびん茶は発酵茶?!

コラムスト 須賀 努



沖繩のお茶と言えば、既に2015年7月号でさんびん茶の由来について紹介しているが、今回沖繩を再訪し、更に分かったこと及びその他の茶について、報告してみたい。

まずさんびん茶については『中国の福州から来たジャスミン茶(香片茶)』である。それは間違いではないが、それだけではなかった。というか、ある意味で大きな勘違いをしていたとも言える。我々が現在知るジャスミン茶とは概ね『緑茶+ジャスミン花』だが、沖繩で飲まれているさんびん茶は『発酵茶+ジャスミン花』が主流だったといことだ。

これはどういことだろうか。確かにジャスミン茶の茶は緑茶だとは言っ

ていない。また福建省は昔から烏龍茶などの発酵茶が有名である。当然発酵茶に花を交ぜる茶もあったはずだ。だが現在のジャスミン茶市場は中国では北部が中心。彼らは緑茶ベースを好むので、それに合わせて変化したということかもしれない。

ただ沖繩では発酵茶ベースが好まれた、と昔コックをやっていたという老人は語る。『沖繩では昔から豚の油ラードが料理に使われ、脂っこいものにはこの発酵茶がよく合うんだ』というので納得した。更には『近年のさんびん茶が、中国から来る、安い、緑茶ベースの物に代わって来たのは、人々の食生活がサラダ油などに代わってきたからさ』と言われ、現在のさんびん

茶がいわゆるジャスミン茶に近づいた理由を垣間見た思いだ。因みに緑茶より発酵茶の方が好まれた理由として『暑い地域で茶の消費量が多く、1、2煎で出がらしとなる緑茶より、数煎飲める発酵茶の方が経済的だ』という話もあった。

その上、ある時期さんびん茶は台湾からもやってきたというのでかなり混乱する。特に1930・60年代、中国産より台湾産が多かったとの話もある。1943年の報道では沖繩の茶の消費量が多いが、その90%は県外産で、台湾産が70%を占めていたとある。そのことは日本統治や戦争と密に関係していることは間違いない。また地理的な近さもあっただろう。ある茶関係者は『台湾の包種茶、ああそれはさんびん茶だよ』と即座に答えてくれた。この台湾さんびん茶は包種茶に花を交ぜた包種花茶ではないか、というのが現状での筆者の想像だが、どうだろうか。また沖繩には清明(シーミー)茶と

呼ばれるものもあった。このお茶は既に幻の茶になっており、沖繩でもこのお茶を購入できるお茶屋さんには3軒しかない、と言われた。沖繩大百科事典によれば『清明祭のころに摘採製造した新茶の総称。明治年間から支那茶を清明茶と称していたと思われる』とあり、中国茶の総称のような表記が見られた。

ようやく探し当ててその茶を見せ



写真: 昔のパッケージで売られている現在のさんびん茶

てもらいと、小さな球形で、さんびん茶より発酵度が高く、花香も強いという印象を受けた。中国で以前見たことのある龍珠茶などと言われるもののようだった。事典の表現から推察するに、明治期に中国から輸入された茶葉の多くが、清明茶だったということではないだろうか。

中国からの茶の輸入の歴史に関しては、清代に中琉朝貢貿易により大量の茶葉がもたらされたとの記録がある。茶葉は細茶葉、中茶葉など、等級で表示されており、どんなお茶だったかは分からないが、その輸出港から考えて、これが福建で作られていた烏龍茶など発酵茶だった可能性は十分にある。更にはそれに花香を付けていたかもしれない。

また沖繩県になった後も、琉球王尚家関連の貿易会社、丸一洋行の支店が福州に設立され、日本の一般会社より現地での信用度は高かったようで、茶葉貿易をかなり行っていたという。丸

一の輸出品は中国緑茶だったとの話もあるが、これはジャスミン茶、いや発酵茶+花、ではなかったのかと勘繰りたくなる。そういえば、福州にあった琉球の出先機関、琉球館で大正時代にジャスミン茶が作られていた、との話を現地で聞いた記憶もあるが、ここから輸出されたのかもしれない。

戦前はさんびん茶より清明茶の方がよく飲まれていたとも聞いたが、それは球形ではなかったらしい。今では常連の老人が買っていくのみで、あまり売れないので、仕入れも殆どないが、現在扱っている清明茶はなぜか台湾産だと言われた。それは台湾経由で入ってくるということではないか、と勝手に想像している。事実1930年代でも、福州の茶が一旦台湾に渡り、そこから沖繩へ輸出されたと聞く。沖繩と台湾の関係、さんびん茶と清明茶の関係、調べれば調べるほど謎は深まり、頭は混乱してくるが、実に面白い。

(すが つとむ)